2025 年の春分は 3 月 20 日です。

太陽が真東からのぼり、真西に沈む日。昼夜の長さが同じになります。
春の彼岸のちょうど真ん中にあたる日を春分といい、
春分と前後 3 日間を含めた 7 日間を「春のお彼岸」とし、
ご先祖さまを供養したり、お墓参りをする日としても知られています。
仏教においてあの世とこの世がもっとも近づく時期とされています。
　ご先祖様と過ごし感謝する期間の行事という点では共通していますが、
お盆は夏、お彼岸は春秋という時期の違いに加え、お盆は帰ってくる
ご先祖様の霊を迎え入れる、
お彼岸はこちらから近くまで行ってお招きするという違いもあります。

「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉があるように、
寒さは和らぎ過ごしやすい季節になります。
桜の開花情報が聞かれるのもこの頃からです。
春分の日とは、昭和 23 年の祝日法の制定当初から
設けられている国民の祝日です。
「自然をたたえ、生物をいつくしむ」ことを目的とした日です。

なぜ春分の日は祝日となっているのでしょうか。
これは、古くから春分の日には皇室行事「春季皇霊祭（しゅんきこうりょうさい)」という
宮中祭祀が執りおこなわれてきたことに由来します。
春季皇霊祭とは春分の日に宮中の皇霊殿で行われる歴代の天皇・皇后・皇親の霊を祭る儀式で、
宮中祭祀のひとつ。先祖を祀るお祭りのことです。
戦前の日本では非常に重要な儀式の一つとされてきたため、国民の祝日となりました。

『山里は　万歳遅し　梅の花』　松尾芭蕉

（やまざとは　まんざいおそし　うめのはな）
意味：「辺鄙(へんぴ)な山里では、正月も半ば過ぎ梅の花が
咲く頃になって、ようやく万歳がやってきたことだ」
この句は、松尾芭蕉が元禄 4 年（1691 年）の正月すぎ、
故郷の伊賀上野で過ごした際に詠んだ句です。
「おくのほそ道」の旅から戻った、晩年の時期にあたります。
自らの老いと死を覚悟しながら挑んだ過酷な旅を終え、
久しぶりに訪れた故郷ののどかな風情に、芭蕉の心やすらぐ姿が目に浮かびます。
　この句に用いられている「万歳」とは、正月を迎えた民家で「千年も万年も栄えるように」
と新年を祝う民俗芸能です。